

仮熱は自然に消失する。

② 寒因寒用：寒によって寒を治療する。

寒因寒用とは、寒性の薬物を用いて仮寒の症状が現れた疾病を治療することである。体内で盛んになった裏熱が体表へ陰を押しやる陽盛格陰証，すなわち本質は熱でありながら寒象が現れる真熱仮寒証に用いる。

例えば、よい適応に熱厥証がある。四肢厥冷（四肢の冷え）や脈沈など、寒証を思わせる症状を認めるが、これらは体内で盛んとなった陽が陰を体表に押しやったために現れた仮寒の症状である。同時にみられる壮熱，心煩，口渴，冷たいものを飲みたがる，尿の色が濃く量が少ないなどの症状が，病態の本質が熱盛であることをうかがわせる。寒涼性の薬物を用いて真熱を治療すれば，仮寒は自然に消失する。

③ 塞因塞用：補うことで塞がりを開く。

塞因塞用とは，補益の薬物を用いて閉塞の症状が現れた疾病を治療することである。虚によって生じた閉塞症状など，表に現れた症状が実を思わせるものでありながらその本態は虚で

ある真虚仮実証に用いる。

例えば、よい適応に脾虚による脘腹脹満がある。脹満感そのものは邪気による実証を思わせる症状であるが、拒按を認めず、悪化と改善を繰り返し、食欲不振、舌質淡、脈虚無力など正気の虚損による症状を伴う。このような場合、水湿や食積などの証候がなければ、健脾益気の治療を行う。それによって脾気が養われ運化の機能が回復すれば、腹脹は自然に消失する。その他、慢性疾患に伴う精血不足による便秘、血虚や衝任虧損による閉経（無月経）なども、塞因塞用のよい適応である。

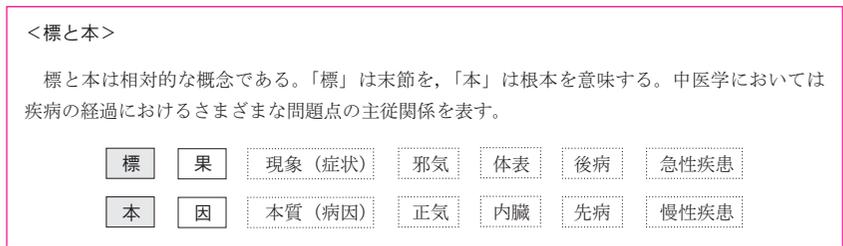
④ 通因通用：通によって通を治療する。

通因通用とは、通利の薬物を用いて通泄の症状を呈する疾病を治療することである。

例えば、食積による腹痛や瀉下不暢（排便後にすっきりしない）、熱結傍流（糞塊の傍らに水液が流れ出る）、瘀血による崩漏、膀胱湿熱による尿频（頻尿）や尿急（尿意切迫）、排尿痛などは、通泄の症状ではあるが、病態の本質はいずれも邪気の充実である。これらに対して用いられる消導瀉下、清熱瀉下、活血祛瘀、膀胱湿熱の清利などの通利の治療方法は、みな通因通用の例である。

2. 治標と治本

疾病を治療する際には、病態の本と標を見極める必要がある。本と標とは、疾病の経過におけるさまざまな問題点の主と従のことである。例えば、病因と症状の関係では、病因が本で症状が標である。邪正の関係では、正気が本で邪気が標である。疾病の罹患の順序では、以前からある疾病が本であり続発した疾病が標である。



複雑に変化する疾病の病態には、常に本と標，すなわち主と従が存在する。そのために治療にも本病を治療する治本と標病を治療する治標があり，具体的には先と後，急と緩などの区別がある。治療の原則は「病を治すには，必ずその本を求める」であるが，実際の臨床では，疾病の病態に応じて，まず標病を治療しなければならない場合や，標病と本病を同時に治療しなければならない場合がある。

1 急であればその標を治す

「急であればその標を治す」という原則がある。標病が緊急を要し，速やかにそれを解決しなければ，患者の生命が脅かされ疾病の治療のものにも影響がおよぶことがある。そのような場